

県中教研 保健部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 前田 千帆
題 字 金山 泰仁 先生

つなぐ・つながる

指導主事 北村 歌子

今年度、保健部会に関わらせていただき、生徒等が抱える現代的な健康課題が複雑化・多様化する中で、養護教諭の先生方に求められる役割が一層重要になっていることを改めて実感しました。保健室経営、健康相談、健康観察、保健指導、生徒等の心身の健康課題の早期発見・早期対応等、日々、多岐にわたる業務を担っておられます。

研究大会の提案発表では、射水市の取組が紹介されました。長年にわたり市内で共通する生徒の健康課題を明確にし、養護教諭同士が協働して指導案や指導資料を作成していました。また、授業実践のため校内の先生方と共通理解を図り、より生徒の実態に応じた実践へとつなげていることが示されました。さらに、GIGAスクール構想の下、授業や校務でICTを効果的に活用するなど、学校の枠を超えて協働する力の高まりが感じられました。

私自身、学校現場で養護教諭の先生方に数え切れないほど助けていただきました。生徒や保護者の相談だけでなく、教職員の悩み等も受け止めるなど、保健室は誰もが安心して訪れることのできる場でした。また、学校医や地域の方々との連携を担い、コーディネーターとしての役割を当たり前のように果たしてくださったことに、今も感謝の気持ちでいっぱいです。

そのように多くの人を「つなぐ」養護教諭の先生方は、学校全体を支える重要な存在です。ぜひ、自信をもって先生方の気付きを発信し、先生方自身も気軽に何でも相談できる誰かと「つながる」ことを大切にしてください。複雑化・多様化する健康課題を、一人で抱え込まず、「チーム学校」の中核として双方向に情報共有しながら、よりよい解決・改善につなげていただければと願っています。

(西部教育事務所)

連携・協働の一員として

部長 前田 千帆

今年度は、主題解明に向けた3年間の研究構想の最終年でした。この間、研究大会では、「チームとしての学校」の中の養護教諭の在り方や地域の関係機関との多職種連携についての発表がありました。今年度は射水市から、市内や学校内の連携・協働に関する提案発表があり、グループ協議では視点に沿って、熱心な話合いや意見交換が行われました。

射水市では毎年、保健部会が中心となり、題材を一つ決め、指導案や教材を作成し、市内の全中学校において、学級活動での「保健の指導」を行っています。この取組は平成19年に始まり、今では各学校の教育計画の中に位置付けられています。その時々に必要な健康課題を見定め、市内で統一した内容を一齐に指導する体制の構築は、射水市の財産であり、今後も大事に引き継がれ、更に体制の充実が図られていくものと思います。

文部科学省が、子どもを取り巻く困難な課題を解決するための体制整備として「チームとしての学校」を掲げてから10年になります。保健室に来室する生徒は、訴えの背景に様々な問題を抱えており、個別対応の際にも連携・協働は不可欠です。早急に医療機関に繋げなければならないケースもあれば、複雑な家庭環境のために行政機関との連携が必要なケースも増えています。インターネットの利用に関する問題では、ヒヤリとする事例もあります。多様化、複雑化、深刻化が進む生徒の心身の健康問題に対応していくには、学校内外の職種や組織、機関との連携・協働が今後益々重要であると痛切に感じます。

私たちが担う連携・協働の役割は、学校内外に限らず、中教研の一部会として、研究を進めていくことも大事な連携・協働と考えます。来年度からの新たな3年間の研究主題の下、保健部会独自の研究を大切に積み重ねていきたいと思っています。

(高・志貴野中)

第69回 研究大会報告

令和7年10月8日(水) 県総合運動公園

研究主題 生涯にわたって主体的に心身の健康づくりに取り組み、健康で安全な生活を営む
資質・能力を育てる健康教育はどのようにすればよいか

1 提案発表

堀田由果里先生
(小杉南中)、水木
薫先生(射北中)
より、射水市中教
研保健部会の取組
について提案発表
があった。



仮説1：養護教諭と教職員が連携・協働し、
チームで取り組むことで、生徒の健康課題解
決に向けての保健教育を推進することができる。

射水市では、平成19年度より全中学校で、保
健室での個別支援に加え、養護教諭と教職員が連
携・協働した学級活動を学校保健計画に位置付け
て推進してきた。市内で健康課題を共有し、課題
解決に向けた指導体制を構築した。また、「とや
まゲンキッズ作戦の結果」「保健室来室状況」「教
職員アンケート」等から健康課題の把握に努めた。

仮説2：自他の健康な生活を目指して健康課
題に応じた教材や資料を工夫し、生徒同士が
認め合い、自分の考えを広げ深められる場を
設定することで、自分事として課題意識を高
めることができる。

健康課題を意識させ、課題解決への意欲を高め
る教材の工夫として、教材をデジタル化したり、
音声やアニメーションを付けたりし、生徒の関心
を引くようにした。また、「実践意欲を高める場」
の工夫として、実生活に近い場면을ロールプレ
イニングで体験させた。指導案や教材の作成に当た
っては、市内のネットワークフォルダやオンライン
会議を活用した。

<成果◇と課題◆>

【仮説1】

- ◇市内の養護教諭が検討を重ねることで、学級担
任主体で指導できる指導案や資料を整えられ
た。
- ◇養護教諭が教職員への理解と協力を求め、実践
を継続することで、市内の取組の定着につな
がった。
- ◆組織的な取組のために、R-PCDAサイクル
の教職員の評価(C)から、それぞれの立場の
成果と課題を把握し、次年度の改善(A)に生
かすアプローチ方法を検討したい。

【仮説2】

- ◇教材をデジタル化し、音声やアニメーションを
付けたことは、生徒の関心を引き、健康課題を
主体的に解決していく動機付けとなった。
- ◇ロールプレイングで実生活に近い場면을体験
させたことで、生徒の実践意欲が高まった。
- ◆生徒同士が関わり合う中で、見方や考え方に違
いが生まれたり発見があったりするような課題
を設定し、生徒の意欲を引き出したい。
- ◆授業を契機に、健康相談につなげたり掲示物や
保健だよりで発信したりすることで、生徒が自
分事として課題意識をもち続けることが期待で
きる。また、学校保健委員会や生徒会活動で取
り上げ、健康教育の場を継続的に設けたい。

2 部会協議

部会別協議では、
会員が11グループ
に分かれ、2つの
視点で、それぞれ
協議を行い、全体
で共有した。



視点1 課題把握の工夫とチームで取り組むための体制づくりについて

- ・担任による指導がよかった。保健指導は、普段の生活をよく知る担任が入ることにより、継続的な指導や生活改善にもつながると思う。
- ・担任をサポートする形で、養護教諭も専門的な部分の説明に参加できるとよい。
- ・市全体の傾向として分析しているが、各学校の実態に合うか。実態に応じて、各学校で「学年で内容を変更する」「いくつかの指導案の中から学校の実態に合ったものを選ぶ」形もよい。
- ・保健の指導を担当が行うことで担任の意識が高まり、担任からの声かけで生徒の意識の高まりも期待できる。
- ・授業後にどのような事後指導や継続指導をするのか、生徒の意識継続を図る取組が大事である。
- ・教材や資料がデジタル化されており、音声入りの動画等、生徒の視聴覚に訴える資料が多く、参考になった。また、各校の実態や課題に応じて修正できるのがよい。

視点2 自他の健康な生活を目指して主体的・対話的に学ぶ指導の工夫について

- ・生徒が個人の端末に入力した回答は、学級全体で結果を共有するなど、活用できるのではないかな。
- ・意識の継続を図るには、保護者の理解や協力も必要であり、家庭との連携が課題である。
- ・課題を決めるときに教職員アンケート、来室記録を参考にしていると聞いた。教職員のニーズが低くても養護教諭が指導の必要性を感じたときに、どのような形で伝えていくか考えたい。
- ・とやまゲンキッズ作戦の7項目の5年推移により、課題が焦点化されている点がよかった。授業で補えない部分は、前後で生徒会活動を活用する方法もあるのではないかな。

- ・ワークシートがよく工夫されていた。健康バルーンの説明のアニメーションや色塗り作業により、生徒自身の健康課題のイメージが膨らんだ。健康バルーンは項目を変えると別の課題でも使えるのではないかな。
- ・ロールプレイのワークシートに「聴き方のポイント」「聞き役」「話し役」等の表示や、学習したことを記入できるメモ欄があるとよい。
- ・ストレスは全てが悪いものではないので「追い風・向かい風」といった表現でもよいかもしれない。

3 指導講話

北村歌子指導主事（西部教育事務所）からは、「養護教諭と教職員がチームで動くための課題把握」「生徒が健康課題を自分事として意識を高める工夫」について指導助言をいただいた。



- ・生徒の健康課題把握、校内の連携、市内での情報共有、指導案の改善、ICT活用が組織的な取組を機能させている。
- ・チェックシートや健康バルーンを掲載したワークシートの工夫で、自己理解が深まり、課題が明らかになった。
- ・生徒同士が関わる場を設定したことで、生徒の実践意欲が高まった。
- ・事後アンケートを活用し、授業の評価や指導の成果を可視化することが指導改善につながる。
- ・実践意欲を継続させるために、学級活動、生徒会活動、学校保健委員会を活用した保健指導を行い、掲示物や便り、ホームページ等で情報を保護者や地域に発信することが大切である。
- ・健康教育は、知識の提供だけでなく、生徒の生き方に関わる教育であり、養護教諭の専門性が生徒の未来に大きな影響を与えるものなので、今後も取組を推進していくことを期待する。

実践的研究の進め方 日々の実践を研究的にまとめてみよう

講師 静岡大学教育学部養護教育専攻 教授 鎌塚 優子 先生

1 はじめに

現代の子供の健康課題は、多様化・複雑化・深刻化し、更には重層化しており、個々の複雑な内容に対してのアプローチが難しくな



ってきている。保健室は、様々な課題を抱える子供たちと関わる最前線であり、養護教諭の多くは一人で保健室経営をしている。保健室は多目的・多機能な空間であり、課題を見つける宝庫でもある。事例を交えた演習を通して、養護教諭の日常の執務から研究テーマを探すことをしてみたい。

「養護実践」とは、児童生徒等の心身の健康の保持増進によって、発育発達支援のために、養護教諭が目的をもって意図的に行う教育活動である。まずは実態ありきで、実態調査が行動を起こすための根拠となる。

2 研究計画書作成について

研究を進めていくためには、具体的な計画が必要である。研究は、計画書で9割が決まる。研究テーマを模索する上で、「気がかりなこと」「関心領域(研究価値)の絞り込み」「解決したい問題の明確化」の3つの思考のプロセスが重要である。テーマを絞っていく過程で問いをもつと、研究で明確にしたいことや解決したいことが見えてくる。3つの思考プロセスは、「研究の背景(はじめに)」を整える際にも重要である。

また、計画書には、対象や時期、具体的な研究方法、結果の分析方法を記載する。研究方法や分析方法については、その方法が適している理由を記し、具体的なスケジュールを立案する。

3 研究の背景(はじめに)について

次の5つのステップで研究の背景を考える。

- ①動機や経験、日常的な疑問、社会的背景を記載する。
- ②先行研究を記載する。
- ③自身の考え、疑問や反論を記載する。
- ④研究を行う意義・価値を明記する。
- ⑤研究の最終目的である「明らかにしたいこと」を明記する。

4 結果と考察について

「結果」は、分析によって分かったことを再構築する。この時に研究目的から外れないように、常に研究の目的、結果と考察が一貫して整合性があるかを意識することが大事である。

「考察」は、結果を根拠とし、これまでの知見を基にして様々な角度から吟味する。明確になったこと、ならなかったことを簡潔に書き、実践的理論的に述べる。仮説と違った結果になった場合は、理由を残しておくことに意義がある。

研究をまとめていく上で、倫理的配慮の方法(対象者の同意)や研究で使われる概念や用語を整理して、研究者の捉え方を記載する。また、引用文献を記載し、自分の考えと人の考えの違いを明確にしておく必要がある。

5 おわりに

養護教諭の日々の実践の中には、いろいろな課題が転がっている。意外な思い込みもあるので、経験則での思い込みを一度リセットし、日々の実践の中で感じる課題や疑問に着目し、楽しみながら科学的に実践研究を進めてほしい。

小谷 茜(南・井波中) 大橋裕里佳(上・上市中)
辻 元美(富・八尾中) 中澤 愛理(氷・西條中)
野口由美子(小・石動中)